

日本人学生の外国人観

村田 雅之

I. はじめに

外国人と日本人のコミュニケーションにおいて、相互に対する意識は、重要な意味を有する。国際化の進展に伴い、日本人の外国人に対する意識の研究の意義は、ますます高まってきている。

高等教育の現場においては、外国人留学生は急増の傾向にあり、留学生と日本人学生との人間関係に関する研究がなされるようになってきているが⁽¹⁾、未だ十分に蓄積された状況とはいえない。

このような背景のもとで、留学生との接触という形で、日常的に外国人と接する可能性の高い日本人学生に着目し、その外国人に対する意識を明らかにすることには、意義があるものとする。

そこで、本研究では、日本人学生の外国人観について、「外国人への（非）受容的態度」と「外国人イメージ」の2側面を取りあげ、次のような構成により、基礎的な考察をおこなうものとした。

まずII章では、「外国人観」の3つの認知要素を設定し、質問形式の設計および分析の準備作業をおこなった。III章では、分析の対象となる2つの調査（大学院生調査、1年次生調査）の概要を示した。

IV章では、外国人に対する2つの「距離」を軸に6つの意見項目を設定し、そのうえで、各項目に対する賛否と、同じ項目に対する日本人一般の賛成者比率（推測）の状況を示した。さらに、受容的態度の規定要因や、自分の受容的態度と他者の受容性認知の関連について論じた。次のV章では、6つの国の人々について、（自分が）「どのように思うか」と、（その国の人々が日本人を）「どのように思っていると思うか」の2側面を設定し、そのうえで、各国

人に関するイメージの現状、その相対的順位、および「直接イメージ」と「被視イメージ」の関連について論じた。

最後のVI章では、今後の課題等について述べた。

II 外国人観の設定

日本人の外国人観に関する従来の研究においては、「好き嫌い」「親近性」「イメージ」「社会的距離」など、様々な視点が設定されてきた⁽²⁾。また、測定についても、SD法、社会的距離尺度など、さまざまな手法が導入されている。しかし、回答者が、外国人に関する直接的な記述に対して、自分の視点からみた評定をおこなう、という質問形式は概ね共通している。

本研究では、次図のように、外国人観の3つの認知要素を設定し、要素①を狭義の外国人観、要素②と要素③を広義の外国人観として捉えた。

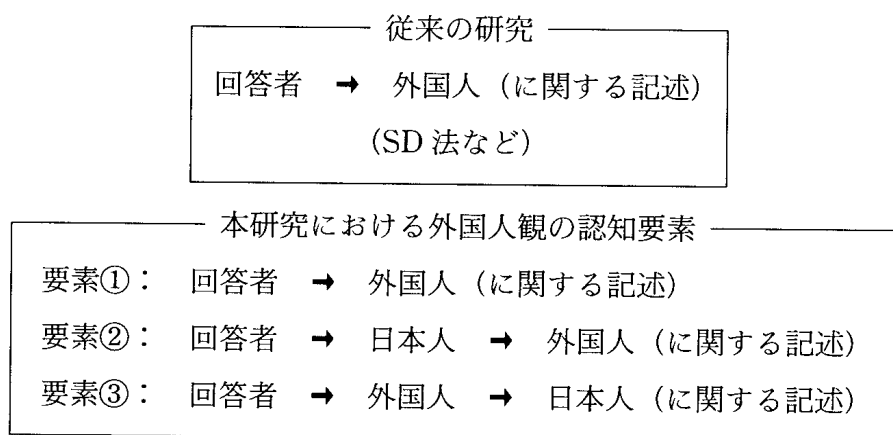


図 1 認知要素の設定

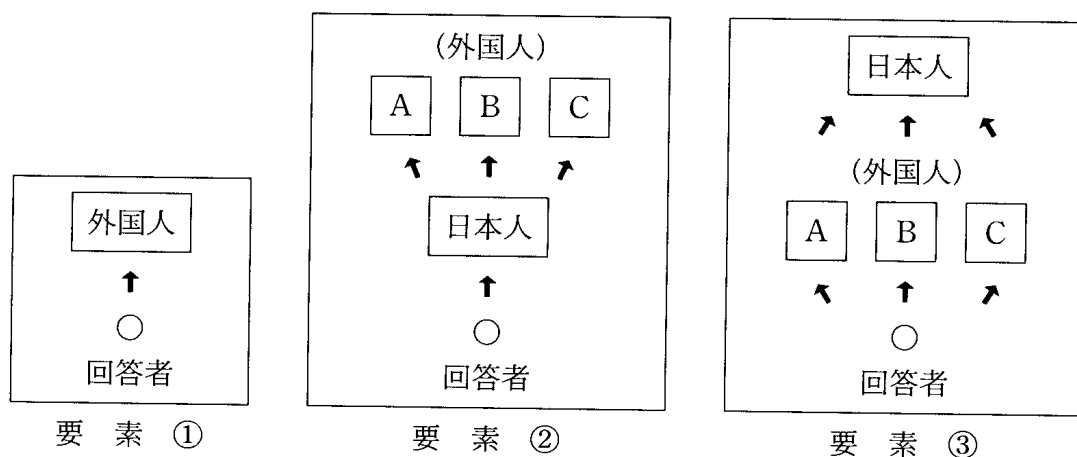


図 2 3要素の概観

要素①は、従来の内容と同じ、直接的回答である。要素②は、日本人が外国人に関する記述にどう答えるか推測する要素で、間接的な外国人観といえる。要素③は、外国人が日本人に関する記述にどう答えるか推測する要素で、これも間接的な外国人観と考えることができる。

視点を変えると、②では外国人に対してそのような評定をする人々として日本人を捉え、③では外国人からそのようにみられている人々として日本人を捉える、という側面を同時に有するため、それぞれは広義の日本人観でもある、といえる。

なお、「外国人への（非）受容的態度」と「外国人イメージ」の2側面について、調査設計上、前者では要素①と②、後者では①と③に対応する質問形式を導入するものとした。

III 調査の概要

上記の枠組に基づく質問を含む2つの調査の概要（対象者の主な属性を含む）は、以下の通りである⁽³⁾。

表 1 大学院生調査の概要

調査対象者	T 大学 大学院生
調査実施	1991 年 3 月
調査方法	郵送/同封の封筒にて返送
標本数	295 票
回収率	160 票 (54.2%)
備考	対象者は、首都圏の理工系大学工学部の修士1年次生である。

対象となる大学院生（表1）の年齢は23才39.4%、24才41.9%、25才15.0%、26～33才3.1%と、23～24才が8割である。国籍は日本99.4%、日本以外は0%であった。性別は男94.1%、女5.0%と男性が多い。海外渡航・滞在経験は「ない」55.6%、「1回ある」26.8%、「2回以上ある」17.5%と、4割以上が経験がある。

表 2 1 年次生調査の概要

調査対象者	T 大学工学部 1 年次生
調査実施	1991 年 3 月
調査方法	郵送/同封の封筒にて返送
標本数	150 票
回収率	77 票 (51.3%)
備考	対象者は、首都圏の理工系大学工学部の 1 年次生である。

1 年次生については(表 2)、年齢は 19 才 48.1%，20 才 44.2%，21～31 才 7.8% である。国籍は日本 100%，性別は男 83.1%，女 16.9% である。海外渡航・滞在経験は「ない」85.7%，「ある」14.3% であり、経験があるのは 7 人に 1 人である。

IV 外国人に対する受容的態度

1 視点の設定

本研究では、外国人への受容的（あるいは非受容的）態度に関する意見項目を設定するうえで、外国人に対する「距離」に着目し、「関係的距离」と「空間的距离」という 2 つの視点を設定した。

前者は、社会的な関係における距離であり、例えば、近親者が国際結婚するような場合についての認識である。後者は、物理的な距離であり、例えば座席が隣合せになるような場合についての認識である。これらは、一方において近くとも、もう一方においても近いとは限らない。したがって、図 3 のような、①近・近、②近・遠、③遠・近、④遠・遠、の 4 つのセルが想定できる。

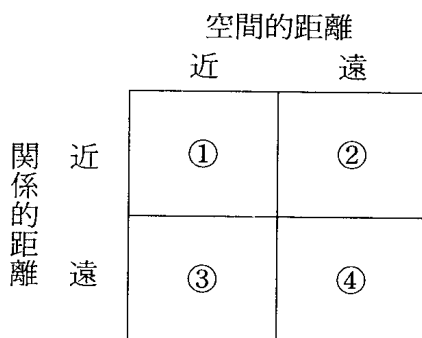


表 3 「距離」と質問項目との対応

関係	空間	質問項目
近	近	友人関係経験
近	遠	家族国際結婚
遠	近	隣合せ抵抗・つきあい拒否
遠	遠	多数居住問題・日本文化同化

図 3 「距離」の枠組

以上の枠組により、質問項目を表3のように設定した。すなわち、
「外国人と親しい友人になることは、とてもよい経験になる」(近・近)
「自分のきょうだいが、仮に国際結婚するとしても抵抗を感じない」(近・遠)
「電車の中などで、外国人と隣合せになることには抵抗がある」(遠・近)
「必要な場合を除き、外国人とはつきあいたくない」(遠・近)
「多数の外国人が日本に住むようになるのは好ましくない」(遠・遠)
「外国人は日本にいる以上、日本の文化に同化すべきである」(遠・遠)
の6項目である⁽⁴⁾。

なお、質問文中のワーディングとして、「外国人」には大きな問題が残る。一般的な対外国人観を論じることができる一方で、回答者がどのような外国人を想定して回答しているのかが曖昧となってしまう。アジア系なのか欧米系なのか、等といった点で、回答が異なる可能性は無視できないはずである。しかし、ここでは、とりあえず外国人一般について議論する。そのような限界があることを踏まえたうえでの議論にとどまることは、述べておかねばならない⁽⁵⁾。

2 外国人への受容的態度

大学院生と1年次生に対して、6項目に対する賛否と、同じ項目に対する日本人一般の賛成者比率(推定)を質問した結果を次ページの表4に示す。それぞれは、前章で示した認知要素①と②に対応する。なお、無回答者については、少数のため表示していない。

まず、最も賛成者が少なかったのは、「必要な場合を除き、外国人とはつきあいたくない」であり、どちらも1割に満たない。逆に、最も賛成者が多かったのは、「外国人と親しい友人になることは、とてもよい経験になる」であり、反対者は1年次生では0%、大学院生で1名(0.6%)と、ほとんどいない。すなわち、大多数の学生が、外国人との交流自体には価値を見出していること、(積極的につきあいたいと思うかどうかは不明であるが)外国人とのつきあいを忌避しているわけではないことが示された。

ここで賛成分布の推測をみると、「つきあい拒否」の項目で、大学院生の4割弱、1年次生の3割弱が、日本人一般においては賛成者が多数派(50%以上)である、と判断したことがわかる。この推測が正確なものであるかどうかの検証は、本研究の枠を越える。しかし、少なからぬ割合の学生が、(自分は別としても)日本人の多くは外国人嫌いであると認識している、とみることができる。

表 4 外国人への受容的態度

意見	賛否 (%)		賛成分布推測 (対一般日本人 (%))			
	賛成	反対	0~25	25~50	50~75	75~100
つきあい拒否	7.8	92.2	16.9	55.8	22.1	5.2
	6.9	91.3	17.5	42.5	31.3	7.5
隣合せ抵抗	22.1	77.9	7.8	44.2	40.3	7.8
	21.9	76.3	11.3	41.9	38.8	6.9
多数居住問題	23.4	75.3	11.7	31.2	46.8	10.4
	35.0	63.8	5.6	35.0	50.0	8.1
日本文化同化	45.5	51.9	11.7	40.3	33.8	13.0
	49.4	48.1	6.3	41.9	42.5	7.5
家族国際結婚	70.1	29.9	27.3	49.4	16.9	6.5
	65.0	33.1	30.0	42.5	17.5	8.8
友人関係経験	100.0	0	2.6	5.2	49.4	42.9
	97.5	0.6	0	9.4	47.5	41.9

上段：1年次生 (N=77) 下段：大学院生 (N=160)

次に賛成者が少なかったのは、「電車の中などで、外国人と隣合せになることには抵抗がある」であった。賛成者は大学院生，1年次生ともに2割ほどである。ここで上記の「つきあい拒否」項目の賛成者と反対者で、「抵抗がある」に賛成する比率を比べると，大学院生では72.7%対18.6%，1年次生では83.3%対16.9%と大きく異なっており，表3の「遠・近」の2項目のあいだには強い関連がみられた。次に賛成分布の推測をみると，大学院生，1年次生とも半数近くが，日本人の多数派は「抵抗がある」に賛成する，と判断したことがわかる。

「多数の外国人が日本に住むようになるのは好ましくない」についてみると，賛成者は学部学生では23.4%，大学院生では35.0%と，後者にやや多くなっている。この項目においても，ともに6割弱は「好ましくない」への賛成者が多数派であると推測している。

「外国人は日本にいる以上，日本の文化に同化すべきである」については，大学院生，1年次生とも賛否が二分されている。また，賛成者が多数派と推測したのは，ほぼ半数である。なお，この意見への賛否と，もう1つの「遠・

遠」の項目である「多数の外国人が日本に住むようになるのは好ましくない」との関連をみると、「好ましくない」に賛成するのは、「同化すべき」の賛成者では45.6%であるが、反対者では24.7%となっており、強い関連がみられた($\chi^2=7.46$, $df=1$, $p<0.01$)。外国人に対して「同化」を望む、いわば「自文化中心主義」的な意識と、非受容的意識との関連として、興味深い結果といえる。

最後の「自分のきょうだいも、仮に国際結婚するとしても抵抗を感じない」については、ともに7割程度が賛成である。一方、分布の推測をみると、賛成者が多数派であると判断したのは、それぞれ1/4程度にすぎず、近い親族が国際結婚するとなると「ひっかかり」を感じない日本人は少数派である、と3/4にみられていることになる。

なお、各項目の分布において、大学院生と1年次生とでは、大きな差はみられなかった。

次に、項目間の関連を大学院生についてみたところ、上に示した2つの組(「隣り合せ抵抗」と「つきあい拒否」, 「日本文化同化」と「多数居住問題」)以外では、明らかな関連はみられなかった。例えば、「隣り合せ抵抗」の賛成者と反対者についてみると、「きょうだいの国際結婚に抵抗を感じない」に賛成するのはそれぞれ65.7%と66.1%であり、また「外国人は日本の文化に同化すべき」に賛成するのは51.4%, 50.0%となっているなど、全く関連がみられなかった。

この結果は、もともとの枠組(図3と表3)において、上記2組のみがそれぞれ同じセル(③と④)に属していたことを考えると、理解しやすい結果といえよう。同時にこの結果は、外国人受容に関する複数の質問から「受容度」などの尺度を構成しようとする場合、この「距離」の軸を想定したうえで項目を設定する必要を示唆するものと考えられる。

3 受容的態度の規定要因

ここでは、渡航経験の有無(「ない」55.6%:「1回ある」「2回以上ある」の合計43.8%), 外国関連記事接触の多少(「よく読む」「たまに読む」の合計80.6%:「あまり読まない」「全く読まない」の合計18.7%), 同じ大学の留学生の友人の有無(「いない」29.4%:「1~2人」「3~4人」「5人以上」の合計69.4%)の3つの要因を取り上げ、「隣り合せ抵抗」「日本文化同化」「多数居住問題」「家族国際結婚」の4項目との関連をみた(表5)。なお「友人関係経験」「つきあい拒否」の2項目は、分布の偏りが大きいため分析から除き、またサンプル数の問題から大学院生についてのみ分析した。

表 5 要因別賛成者率（大学院生）（無回答者を除く）

	渡航経験		記事接触		留学生の友人	
	ない	ある	少	多	いない	いる
隣合せ抵抗	27.0	16.4	23.3	22.2	27.7	19.4
多数居住問題	37.1	33.8	50.0	32.3	44.7	31.2
日本文化同化	53.4	47.8	65.5	47.6	54.4	49.1
家族国際結婚	60.2	73.5	56.7	68.3	63.0	67.0

(%)

渡航経験については、「ある」学生のほうが「ない」学生よりも「隣合せ抵抗」賛成者がやや少なく（16.4%対27.0%）、「きょうだいの国際結婚に抵抗感じない」賛成者がやや多い（73.5%対60.2%）。他の2項目については、差は10%未満であった。

記事接触については、「多い」学生は「少ない」学生よりも「日本文化同化」や「多数居住問題」賛成者が少なく（47.6%対65.5%：32.3%対50.0%）、「きょうだいの国際結婚に抵抗感じない」賛成者はやや多い（68.3%対56.7%）。しかし「隣合せ抵抗」については差はなかった（22.2%対23.3%）。

留学生の友人の有無については、「いる」学生のほうが「いない」学生よりも「多数居住問題」賛成者がやや少ない（31.2%対44.7%）が、他の3項目における差は10%未満であった。

以上、渡航経験を持つ場合、外国に関する記事に多く接触している場合、留学生の友人をもっている場合は、それぞれ概ね受容的傾向側であり、20%近い差がみられる組もあるものの、統計的にみると(χ^2 , $df=1$)、5%の有意水準に達している組はなかった（10%は3組）。

今後は、渡航経験の内容（国、期間、理由、渡航・帰国年齢など）、接触する外国関連記事の題材やメディア、留学生の友人との接触の親密度や時間などの要因を、きめ細かく検討しうる調査設計をおこなうことが課題である。

また、他の規定要因を探索することや、他の意識項目との関連を考察すること⁷⁾、さらに留学生の友人がいるけれども、「隣合せ抵抗」には賛成する19.4%（いない場合は27.7%）の大学院生にとって、留学生との実際の対人関係の状況はどのようなものなのかを分析すること、なども課題となろう。

4 受容的態度の構造

ここでは、「自分の受容的態度」（前章の認知要素①に対応）と「他者の受

表 6 認知要素間の関連（「隣合せ抵抗」）（大学院生）

自分 \ 賛成予測	0～50%	50～100%
	賛成 (N= 35)	28.6
反対 (N=122)	60.7	39.3

(%)

表 7 認知要素間の関連（「隣合せ抵抗」）（1 年次生）

自分 \ 賛成予測	0～50%	50～100%
	賛成 (N=17)	17.6
反対 (N=60)	61.7	38.3

(%)

容性認知」（認知要素②に対応）の関連について検討する。

賛否の偏りが大きい「友人関係経験」「つきあい拒否」を除き、「隣合せ抵抗」「多数居住問題」「日本文化同化」「家族国際結婚」の4項目において、要素間の関連をみた。

「隣合せ抵抗」についてみると、賛成が多数派であると予測するのは、自分が賛成の場合、大学院生では7割、1年次生8割だが、自分が反対の場合、ともに4割弱である（表6、表7）。同様に、「多数居住問題」での賛成多数派予測者は、賛成者の場合、大学院生では7割、1年次生では9割だが、反対者ではともに5割前後である。次の「日本文化同化」では、賛成多数派予測者は、賛成者では6割前後、反対者では大学院生は4割、1年次生では3割である。以上3項目については相関がみられる（大学院生の場合、順に $\chi^2=11.25$, $p<0.01$ ； $\chi^2=5.66$, $p<0.05$ ； $\chi^2=3.69$, $p<0.10$)⁽⁷⁾が、最後の「家族国際結婚」については、賛成多数派予測者はどの場合も1/4前後となっており、関連は見られなかった。

以上、「家族国際結婚」を除く3項目において、認知要素間に相関がみられ、「自分の意見が多数派である」という認識がなされやすい傾向が見出された。

このような傾向について、自分がそう思っているから他者がそう見える（投射）のか、逆に、他者がそう見えることによって自分もそうなる（同調）のか、という因果関係については、本研究の範囲では確定できない。しかし、この相関の織りなすシステムが、(非)受容への意識傾向に関して、少なから

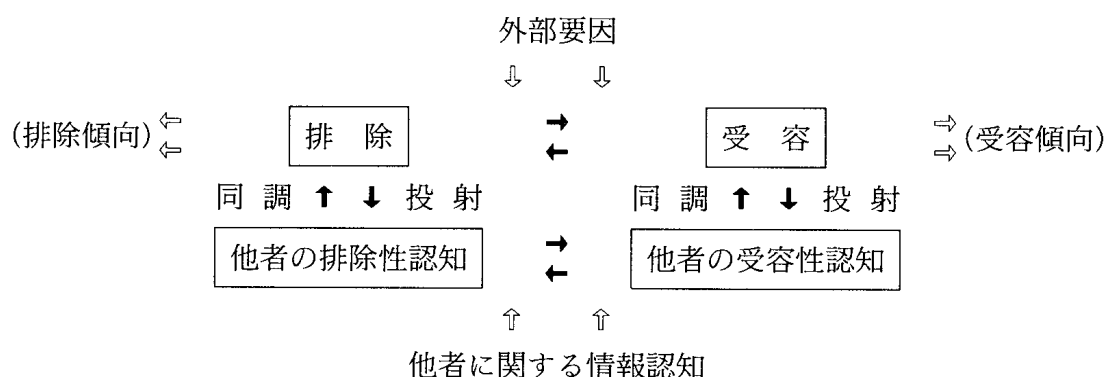


図 4 受容/排除システム・モデル

ぬ意味を有することは、容易に想定できることであろう⁽⁸⁾。この点は、図4のようなモデルを設定し、これを通して考えることで、より理解しやすくなるであろう⁽⁹⁾。

今後は、どのような項目で、またどのような主体において、ここで論じた認知的傾向が強くみられるのか、を分析していくこと、さらに、既存の「多元的無知」(pluralistic ignorance) 研究との接点を持たせるためにも、多数派認知の「正確性」を論ずることができるような調査設計をおこなうことが課題である⁽¹⁰⁾。

V 外国人イメージの構造

1 外国人イメージの設定

日本人を対象として、外国人あるいは日本人自身のイメージをたずねる調査研究は数多い。また、外国人を対象とした日本人イメージの調査もなされるようになってきている⁽¹¹⁾。しかし、外国人からみられる日本人イメージを問題にすることで、間接的に外国人イメージを論ずる、という形式の研究は少ない。

江淵は、「外国人が抱いている(と日本人が考える)日本人に対する感情の諸側面についての自己認識ないし自己イメージ」の問題を取り上げている⁽¹²⁾。そこでは、アメリカ、フランス、ソ連、インドネシア、中国、韓国などの10ヶ国に関し、「次にかかげる国ぐにの人びとは、日本または日本人をどう思っていると思いますか、これらの人びとの日本(人)に対する態度として、あなたが想像されるものと合う項目に○をつけてください」として、「日本人に対し好意的だと思う」「日本人を理解してくれていると思う」などの項目を設定している。

「どのように思われていると思うか」という質問形式を導入し、外国人の対

日感情の自己認識を明らかにすることを通して、外国人イメージの議論をおこなうことは有意義と考える。しかし、従来の研究においては、このような「被視」の視点の導入は数少ないのが現状である。

そこで、ここでは（自分がその国の人々を）「どのように思うか」と、（その国の人々が日本人を）「どのように思っていると思うか」の2側面を設定した（それぞれは、II章で示した認知要素①と③に対応する）。

具体的には、外国人イメージ評価を、「好悪・信頼・親近・理解」（以下「直接イメージ」）と「被好悪・被信頼・被親近・被理解」（以下「被視イメージ」）の各軸について測定、分析することとした。対象国としては、日本における留学生の比率が最も多い国々として「中国」と「韓国」、大国として「アメリカ」と「ソ連」⁽¹³⁾、西欧先進国として「フランス」、上記以外の東南アジアの国として「インドネシア」を選択した。

すなわち、上記6ヶ国の人々について、

- (1) 「好きである」／「嫌いである」
- (2) 「信頼できる」と思う／「信頼できない」と思う
- (3) 「親しみやすい」と思う／「親しみにくい」と思う
- (4) 「理解しやすい」と思う／「理解しにくい」と思う

および、これらの国の人々から

- (5) （日本人は）「好かれている」／「嫌われている」
- (6) （日本人は）「信頼できる」と思われている／「信頼できない」と思われている
- (7) （日本人は）「親しみやすい」と思われている／「親しみにくい」と思われている
- (8) （日本人は）「理解しやすい」と思われている／「理解しにくい」と思われている

の8項目を、5段階尺度において、それぞれ答えてもらうこととした。

2 外国人イメージの現状

前節の設定に基づき、1年次生調査において、6ヶ国×8軸の回答を得た（表8-1、表8-2）。

まず、国別に簡単にみていく。なお、文中での「好意的」は、「好悪」の軸に限定した表現ではなく、4軸に共通の傾向（「好きである」「信頼できる」「親しみやすい」「理解しやすい」）を示しているものとする⁽¹⁴⁾。また、以下の記述における比率は、表のように5段階を3段階にまとめた場合の数値である。

「アメリカ人」に対しては、概ね好意的な比率が高い。「親しみやすい」が

表 8-1 外国人イメージ (1)

(アメリカ)				
「好きである」	36.4	42.9	15.6	「嫌いである」
「信頼できる」と思う	26.0	50.6	18.2	「信頼できない」と思う
「親しみやすい」と思う	68.9	11.7	14.3	「親しみにくい」と思う
「理解しやすい」と思う	32.5	39.0	23.4	「理解しにくい」と思う
(日本人は)「好かれている」	7.8	20.8	74.4	「嫌われている」
「信頼できる」と思われている	13.0	26.0	61.1	「信頼できない」と思われている
「親しみやすい」と思われている	15.6	29.9	54.6	「親しみにくい」と思われている
「理解しやすい」と思われている	2.6	18.2	79.3	「理解しにくい」と思われている
(韓国)				
「好きである」	16.9	63.6	19.5	「嫌いである」
「信頼できる」と思う	26.0	54.5	19.5	「信頼できない」と思う
「親しみやすい」と思う	29.9	36.4	33.8	「親しみにくい」と思う
「理解しやすい」と思う	26.0	41.6	32.5	「理解しにくい」と思う
(日本人は)「好かれている」	6.5	14.3	83.2	「嫌われている」
「信頼できる」と思われている	13.0	19.5	67.6	「信頼できない」と思われている
「親しみやすい」と思われている	6.5	36.4	57.2	「親しみにくい」と思われている
「理解しやすい」と思われている	7.8	44.2	48.1	「理解しにくい」と思われている
(中国)				
「好きである」	39.0	53.2	7.8	「嫌いである」
「信頼できる」と思う	26.0	62.3	11.7	「信頼できない」と思う
「親しみやすい」と思う	36.4	44.2	19.5	「親しみにくい」と思う
「理解しやすい」と思う	29.9	45.5	24.7	「理解しにくい」と思う
(日本人は)「好かれている」	9.1	45.5	45.5	「嫌われている」
「信頼できる」と思われている	22.1	40.3	37.7	「信頼できない」と思われている
「親しみやすい」と思われている	15.6	53.2	31.2	「親しみにくい」と思われている
「理解しやすい」と思われている	9.1	62.3	28.6	「理解しにくい」と思われている

(注) 左より「かなり/やや」「どちらでもない」「やや/かなり」 (%)

表 8-2 外国人イメージ (2)

(インドネシア)				
「好きである」	15.6	80.5	3.9	「嫌いである」
「信頼できる」と思う	11.7	75.3	13.0	「信頼できない」と思う
「親しみやすい」と思う	20.8	59.7	19.5	「親しみにくい」と思う
「理解しやすい」と思う	11.7	63.6	24.7	「理解しにくい」と思う
(日本人は)「好かれている」	22.1	58.4	19.5	「嫌われている」
「信頼できる」と思われている	23.4	57.1	19.5	「信頼できない」と思われている
「親しみやすい」と思われている	7.8	67.5	24.7	「親しみにくい」と思われている
「理解しやすい」と思われている	10.4	64.9	24.7	「理解しにくい」と思われている
(ソ 連)				
「好きである」	32.5	62.3	5.2	「嫌いである」
「信頼できる」と思う	22.1	62.3	14.3	「信頼できない」と思う
「親しみやすい」と思う	24.7	48.1	26.0	「親しみにくい」と思う
「理解しやすい」と思う	14.3	48.1	36.4	「理解しにくい」と思う
(日本人は)「好かれている」	37.7	44.2	18.2	「嫌われている」
「信頼できる」と思われている	31.2	48.1	20.8	「信頼できない」と思われている
「親しみやすい」と思われている	16.9	54.5	28.6	「親しみにくい」と思われている
「理解しやすい」と思われている	9.1	55.8	35.1	「理解しにくい」と思われている
(フランス)				
「好きである」	29.9	63.6	6.5	「嫌いである」
「信頼できる」と思う	22.1	59.7	18.2	「信頼できない」と思う
「親しみやすい」と思う	28.6	46.8	24.7	「親しみにくい」と思う
「理解しやすい」と思う	15.6	55.8	28.6	「理解しにくい」と思う
(日本人は)「好かれている」	7.8	64.9	27.8	「嫌われている」
「信頼できる」と思われている	18.2	55.8	26.0	「信頼できない」と思われている
「親しみやすい」と思われている	10.4	50.6	39.0	「親しみにくい」と思われている
「理解しやすい」と思われている	6.5	49.4	44.2	「理解しにくい」と思われている

(注) 左より「かなり/やや」「どちらでもない」「やや/かなり」 (%)

68.9%となっているなど、親近感を持っていることがわかる。一方、被視イメージの4軸については、「理解しにくい」と思われている」79.3%、「嫌われている」74.4%、「信頼できない」と思われている」61.1%、「親しみやすい」と思われている」54.6%となっており、多数が非好意を予測した分布となっている。

次の「韓国人」に対しては、「好悪・親近・理解」の3項目で非好意的な比率のほうがわずかながら多いが、「信頼」については好意的な比率が多い。被視イメージについては、「嫌われている」83.2%、「信頼できない」と思われている」67.6%など、多数が日本人への強い非好意を予測している。前出の江淵の研究においても、「日本人の自己認識」を調べてみると、「韓国人は日本人を恨んでいるのではないか」あるいは「嫌っている」と見ている人が多い⁽¹⁵⁾という結果が示されており、重なる結果となっている。

「中国人」については、4軸とも好意的な比率が高く、「好きである」の割合は、他国に比べて最も高い。一方、被視イメージについては、日本人への非好意を予測する人のほうが多くなっている。

「インドネシア人」については、「どちらでもない」の比率が6割弱から8割と高い。「好悪」において「どちらでもない」が80.5%となるなど、明確なイメージが持たれていないようである。これは直接の接触はもちろん、マス・メディアにおいても情報が少ないことによると思われる。

「ソ連人」については、比較的好意的である。「日本人のソ連嫌い」について指摘されることがあるが⁽¹⁶⁾、ここでの結果は、傾向が異なっている。被視イメージにおいても、「好かれている」(37.7%)、「信頼できる」と思われている」(31.2%)という認識者が、他国に比べ最も多い。この分布が、いかなる要因によるのかは、今後の課題となろう。とくに調査時期のマス・メディアの論調等の分析が必要と思われる。

最後の「フランス人」については、「理解しやすい」(15.6%)より「理解しにくい」(28.6%)が多いが、「好悪・信頼・親近」の3項目では好意的な割合が多い。被視イメージについては、他国同様、各項目とも非好意側が多い。

ここで、被視イメージを改めて眺めると、インドネシア人とソ連人の「好悪」「信頼」の各2軸(計4軸)を除く20軸で、好意予測者より非好意予測者の比率が多い。その比は10倍以上にも及ぶ場合がある。

このことから、国際環境認知においては、日本人はいわば「否定的自己概念」を持っている、ということが想定できる。

様々な国の人々から、自分たち日本人が、「親しみにくい」「理解しにくい」、いわば「得体の知れない」国民と思われている、と認識すること、また「嫌われている」「信頼されていない」と認識することは、外国人とのコミュニケーションに大きな影響を与えるかもしれない。この自己ラベルの存在は、日本人がうまく外国人とかかわりあえない場合の、原因の一つとなっているのではないだろうか。実際にどうであるかは別として、自分たちを心の底では敬遠している（と自分では思っている）人々と、自分から積極的につきあおうとすることは、なかなかむずかしいことであるからである。その自己概念が、正確な認識であるかどうかは、また別の問題である。

3 各国の順位による比較

各国の状況をより比較しやすくするために、5段階尺度から平均スコアを

表 9 直接イメージ (平均スコア) (() 内は順位)

	中国人	韓国人	インドネシア人	アメリカ人	ソ連人	フランス人
好悪	2.60 (1)	3.05 (6)	2.88 (5)	2.70 (3)	2.63 (2)	2.70 (3)
信頼	2.78 (1)	2.91 (4)	3.00 (6)	2.86 (2)	2.89 (3)	2.94 (5)
親近	2.78 (2)	3.06 (6)	2.95 (4)	2.15 (1)	2.99 (5)	2.88 (3)
理解	2.95 (2)	3.12 (4)	3.14 (5)	2.92 (1)	3.26 (6)	3.09 (3)

(注) 好悪： 「好きである」(1点) … 「嫌いである」(5点)
 信頼： 「信頼できる」と思う(1点) … 「信頼できない」と思う(5点)
 親近： 「親しみやすい」と思う(1点) … 「親しみにくい」と思う(5点)
 理解： 「理解しやすい」と思う(1点) … 「理解しにくい」と思う(5点)

求め、6ヶ国の順位を示した⁽¹⁷⁾。

まず「好悪・信頼・親近・理解」の直接イメージの側からみた(表9)。同じアジアの人々でありながら、「中国人」の場合と、「韓国人」「インドネシア人」の場合では順位が大きく異なること、「中国人」「アメリカ人」には全般に好意的であること、「ソ連人」は「好悪」では上位であるが、「親近」や「理解」の順位は低いこと、などがわかる。

次に「被好悪・被信頼・被親近・被理解」の被視イメージの4軸についてみた(表10)。「韓国人」「アメリカ人」の順位が目立って低いこと、「インドネシア人」「ソ連人」の順位が相対的に高いこと、などがわかる。

表 10 被視イメージ (平均スコア) (() 内は順位)

	中国人 ↓ 日本人	韓国人 ↓ 日本人	インドネシア人 ↓ 日本人	アメリカ人 ↓ 日本人	ソ連人 ↓ 日本人	フランス人 ↓ 日本人
被好悪	3.52 (4)	4.27 (6)	2.97 (2)	3.81 (5)	2.78 (1)	3.26 (3)
被信頼	3.18 (4)	3.87 (6)	2.92 (2)	3.69 (5)	2.86 (1)	3.12 (3)
被親近	3.19 (2)	3.75 (6)	3.22 (3)	3.56 (5)	3.10 (1)	3.39 (4)
被理解	3.23 (2)	3.61 (5)	3.19 (1)	4.18 (6)	3.31 (3)	3.52 (4)

(注) 被好悪: 「好かれている」(1点)…「嫌われている」(5点)
 被信頼: 「信頼できる」と思われている(1点)…「信頼できない」と思われている(5点)
 被親近: 「親しみやすい」と思われている(1点)…「親しみにくい」と思われている(5点)
 被理解: 「理解しやすい」と思われている(1点)…「理解しにくい」と思われている(5点)

主観的な認知の世界においては、「アメリカ人」に対してはいわば「片思い」状況である一方、アジアの隣人である「韓国人」に対してはいわば「相互嫌悪」状況となっているということができよう。この「認知上の状況」が「現実の状況」をどのくらい反映したものなのか、という点は、今後の重要な課題となる。

4 外国人イメージの構造

各国・各軸について、直接イメージの回答と被視イメージの回答(例えば「好悪」と「被好悪」)をクロスして、「日本人が、その国の人々から好意的/非好意的に評価されているという認知と、その国の人々に対する好意的/非好意的な評価は関連する」(「報復仮説」という傾向を想定した⁽¹⁸⁾)。すなわち、

表 11 直接イメージと被視イメージの関連の例
 (「アメリカ人」に対する信頼の場合)

信頼		被信頼	アメリカ人からみた日本人		
			信頼できる	どちらでもない	信頼できない
アメリカ人	信頼できる (N=20)		35.0	30.0	35.0
	どちらでもない (N=39)		5.1	28.2	66.7
	信頼できない (N=14)		0	14.3	85.7

(%)

認知要素①と③の関連をみることになる。

本研究では、全体のサンプル数が少ないため、「かなり/やや」「どちらでもない」「やや/かなり」の $3 \times 3 = 9$ セルでは各セルの分布人数が少なく、また「どちらでもない」が多数の組も多い。そこで、強い関連を示す組もみられたこと（例えば表11）、 2×2 セルにまとめるとほとんどの組で相関が正となることのみを記しておく。

この関連からは、好意と被好意認知による循環を想定することもできないことはないが、現在の「否定的自己概念」傾向（2節参照）のもとでは、むしろ、逆の循環が存在していることが想定される。

この問題は、いわゆる「認知的不協和理論」の枠組からも考察できるであろう。すなわち、仮に自分自身が高い日本評価を有する（+）場合、外国人からの低い日本評価の認知（-）との不協和を、その外国人に対する反感（-）に転化することで逡減する過程が想定できるのである。

VI おわりに

本研究では、「外国人への（非）受容的態度」と「外国人イメージ」の2側面に着目し、3つの認知要素を設定したうえで、2つの調査を分析した。

今後の課題については、すでに各章においても述べてきている。ここではさらに、主な課題と発展について、下に記しておく。

まず、マス・メディアの影響の分析がある。外国人観を形成するにあたっては、マス・メディアが大きく寄与しているものと考えられるが、ここでは検討するにいたらなかった。今後は、接触の量・質と意識との関連を検討したい。

次に、「否定的自己概念」の形成過程、および「（非）好意—被（非）好意認知」の循環過程の分析が課題といえる。横田は、留学生との交流に際して日本人が受け入れるべき「初期の緊張感」を指摘しているが⁽¹⁹⁾、これらの過程を分析することは、この「緊張感」を考察していくうえでも、必要な作業となると考える。

また、外国人観と実際の接触場面での態度との相違や、外国人の国籍、性別、年齢、日本語能力、母国での社会的地位、留学生であるかどうか、等による受容的態度の相違、日本人観と外国人観の関連などについて明らかにすることも、発展として重要であると考えられる。もちろん、より広範なサンプルによる調査の実施も重要な課題となる。

以上、本研究では傾向を論ずるにとどまったが、今後も留学生を含む外国

人と日本人との人間関係について、考察を続けていく予定である。

注

- (1) 留学生と日本人の人間関係の現状や問題に関する多角的研究の不足を指摘した研究に、横田雅弘「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」、『異文化間教育』第5号、1992年、81-97頁がある。なお、筆者は日本人学生の留学生観、留学生チューターの仕事観などを視点として、外国人留学生と日本人との人間関係について研究を継続しており、本研究も一連の研究に属する。村田雅之・原芳男「チューターの仕事の現状と仕事観」、『日本社会心理学会第32回大会発表論文集』、1993年、458-459頁。村田雅之「日本人学生の留学生観」、『異文化間教育学会第15回大会発表抄録』、1994年、102-103頁。
- (2) 例えば「好き嫌い」については我妻・米山、「イメージ」については江淵などの調査研究がある。我妻洋・米山俊直『偏見の構造——日本人の人種観』、日本放送出版協会、1967年。江淵一公「日本人の対外イメージとその形成過程」、『福岡教育大学紀要』第35号、1985年、1-26頁。また「外国人に対する受容の態度」については、児玉好信・井上佳朗・天沼常明「アジアに向く顔と欧米に向く顔」、日本人研究会編『日本人研究 No. 5』、至誠堂、1977年、15-42頁があり、同書にある柴田博「日本人の国際結婚許容度」、45-78頁も参考になる。
- (3) この2調査は、追記に記した論文における7つの質問紙調査のうちの2つである。各調査への質問配分により、V章の分析においては1年次生のみを対象が限定された。
- (4) 反省点であるが、「多数の外国人」の「多数」の規模が曖昧なため、ワーディングとしては問題が残る。
- (5) 質問文において「外国人」として国籍を特定しないことについては、外国人留学生や労働者の増加に対する認識や、外国人との結婚に対する抵抗などに関してたずねた次の調査とも限界を共有する。『国際化と国民意識（昭和61年度国民生活選好度調査）』、経済企画庁国民生活局編、1986年。
- (6) 例えば、次のような分析である。
 - 1) 「老人」も「外国人」も、日本人学生にとっては一種の「異人」であり、一方に対して排除的である人は、もう一方に対しても排除的なのではないか、という予測に基づき、「老人に対して否定的な認識を有する人は、外国人に対しても非受容的傾向が強い」という仮説（「異人仮説」）を設定し、1年次生について検討した。「老人とはあまりつきあいたくない」の賛成者12人（15.6%）と反対者62人（80.5%）とでは、「隣合せ抵抗」の該当者がそれぞれ41.7%、19.4%となっており、人数が少ないため問題は残るものの、大きな差がみられることがわかった。
 - 2) 次に「外国人に対する偏見」の自己評価（大学院生）の7段階を、「偏見がある」（45.7%）、「どちらでもない」（14.4%）、「偏見がない」（38.8%）の3段階にまとめ、意見項目との関連をみた。「電車の中などで、外国人と隣合

せになることには抵抗がある」の賛成者は、「偏見がない」の場合 4.2%、「どちらでもない」では 21.7%、「偏見がある」では 44.3%（無回答者を除く）となっており、自己評価は意見と非常に強く関連していた。しかし、「外国人は日本にいる以上、日本文化に同化すべきである」の場合は、ほとんど相関はみられなかった。すなわち「偏見がない」と自負する人も、そうでない人も、4割から半数前後が「同化すべき」に賛成していた。ここから、自分は偏見がないと自負しつつ接触し、文化的同化を無自覚に強いることで反発を受け、好意が通じない相手だと決めつけてしまう、という過程を想定できるが、この過程の考察は重要な課題となろう。

- (7) 人数が少ない1年次生でも 8.60, 8.37, 9.57(各 $p < 0.01$:補正済)であった。
- (8) 差別意識に関する議論において、多数派である（と認知した）人々に同調する過程が論じられることがある。例えば、次のような議論である。「私は差別はまちがっていると思うし、差別したくない。けれども世の中の多くの人々は差別している。だから、しかたがない」。じつは「差別している世の中の人たち」の少なからぬ部分は、この人自身と同じように、受動的に差別的多数者に同調しその多数者の傾向を強化し、そのことによって他の人々を同調せしめ、差別をいっそう根深いものとして再生産してしまうのではなかろうか。そのとき、かりに「幻想の多数派」であったとしても、それは実際に「威力をもつ多数派」に転化してしまう。このようなタイプの差別を「同調型差別」とよぶことにしよう」（田中欣和編著『解放教育論再考——教育労働者の今日的課題——』、柘植書房、1991年）。

このような議論からは、他者（多教者）がどのように考えていると認知するか、が重要な要因であることが示唆される。しかし、この「他者に対する認知要素」を視点として、日本人による外国人に対する排除を論じた研究はほとんどなく、研究の蓄積がなされていないのが現状である。なお、差別意識論の領域で、海野らは、この視点を有する数少ない実証研究をおこなっており、また、菱山は「自己の社会的態度」と「社会的風潮」とを組み合わせた類型モデルを提示しているが、いずれもその後の発展はなされていない。海野道郎・鏡豊「偏見の内部構造」、『関西学院大学社会学部紀要』34号、1977年、51-65頁。菱山謙二「同和問題に関する住民意識の現況と行政の課題」、磯村英一編『同和行政論IV』、明石書店、1985年、65-110頁。

- (9) このようなモデル構築によって、「マス・メディアが直接に行為の促進・抑制に影響するのではなく、他者に関する情報認知に影響し、（時間的経過を経て）間接的に行為の促進・抑制に影響する」という過程を、仮説として設定できる。なお、このモデルは、拙稿における「促進/抑制システム・モデル」と同様の構造を有する。村田雅之「逸脱研究における認知論的モデルの導入と展開」、『犯罪社会学研究』第17号、1992年、150-161頁。
- (10) 「多元的無知」の解説としては、次のようなものがある。「第二次大戦の終るころ、自分は戦争をやめるべきだと思っていながら、他人はみな戦争を続行すべしと考えていると信じていた人が多かった。このように、他の人たち（集団のメンバー）の考えをおたがいに知らないために、ほんとうは大部分の人がそう考えていないのに、みんなそう考えていると思うこみ、表面上それに

同調して、その考えが一般的な考えだと思ってしまうこと」（「多数無知」宮城音弥編『岩波心理学小辞典』、岩波書店、1979年）。

この「多元的無知」の議論では、見積りの「正確さ」や「価値の歪曲の方向」が問題とされてきた。また「多数派意見を自己意見と同一に推測する傾向」について、「鏡像知覚」(looking-grass perception)といった概念化がなされている。概念的な検討は次の論文に詳しい。後藤将之「認知論的マスコミ研究の検討——共志向、多元的無知、〈沈黙のスパイラル〉をめぐって——」、『東京大学新聞研究所紀要』34号、1986年、211-249頁。

- (11) 例えば、以下のような調査研究がある。岩男寿美子・萩原滋『日本で学ぶ留学生——社会心理学的分析——』、頸草書房、1988年(留学生対象)。辻村明・古畑和孝・飽戸弘編、『世界は日本をどう見ているか——対日イメージの研究——』、日本評論社、1987年(7国の国民対象)。大山七穂「日本・日本人のイメージ研究」、『国際社会と国際協力(国際関係学双書6)』、北樹出版、1990年、41-97頁(外国人研修所滞在者対象)。
- (12) 江淵一公、前掲論文、1985年。
- (13) 調査時期(1991年)においては、まだ「ソ連人」として質問を提示することが可能であった。
- (14) 「理解しやすい」という認識を、「好意的」とみることには問題がないわけではないが、ここではとりあえず好意的傾向を示すものとしておく。
- (15) 江淵一公、前掲論文、1985年。
- (16) 例えば、渡辺良智「高校生のソ連イメージ」、『青山学院女子短大紀要』34号、93-121頁、1980年。
- (17) スコア上の微少な差の意味については検討が必要であるが、とりあえず傾向を大きくつかむ上では「順位」は有効な指標と考える。
- (18) 「好きな/嫌いな相手からは、好かれて/嫌われているように見える」という傾向は、いわゆる「好意の返報性」として、ソシオメトリ等の領域においてしばしば指摘されてきた。なお、ここでの被視イメージにおいて認知する視線の対象は、「自分自身」ではなく「日本人」であり、個人でなく自分を含む日本人が(非)好意的にみられていると推測するかどうか、を認知要素として注意する必要がある。
- (19) 横田雅弘、前掲論文、1991年。

追 記

- 1) 本稿は、村田雅之『留学生の異文化適応に関する研究』、東京工業大学大学院学位論文、1993年の一部に加筆修正したものである。
- 2) 本研究の一部は、日本社会心理学会第32回大会にて発表した。村田雅之「日本人の対外国人意識の構造」、『日本社会心理学会第32回大会発表論文集』、1991年、372-373頁。
- 3) 本研究のデータは、「留学生の適応過程における相互理解の構造に関する研究」(文部省科学研究費(一般研究C)、研究代表者：原芳男)による。原芳男先生に深く感謝申し上げます。